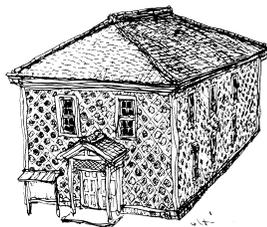


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、デベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、明治8年に開館した日本最初の演説会堂です。

「継ぐ」ということ

教壇に立ちながらふと思うことがある。

自分はあと何回この講義ができるのだろう。毎週、日吉の教室でマイクを握るが、授業の出来不出来のバランスシートはやはり後者に傾く。まあ、来年度はもっと工夫を凝らして改良を加えようと、そのたびに決意するのだが、しかし、当該年度の履修者諸君とは一回限りの出会いであり、another roundはない。思えば、何百人もの塾生というbest and brightestを前にして90分間も独壇場をはれるということは、特権以外の何物でもない。果たして、自分はそれに自覚的であったか。この特権も、定年までを数え上げれば、もうそんなに回数は残されていない。

さらに、講義科目には自分の名前と職位が明記されている。自分がそれを担当する固有の意味はあるのか。教室で何を語り、学生に何を残せるのか。衝動感是否応なしに高まるが、それも東横線の車窓から眺める景色の中に消えていく。

学問は壮大なリレーである。福澤諭吉の思想と哲学はもちろん、それぞれの学問領域の知的遺産、ひいては「大学」という

仕組みと空間そのものも、先人の学燈のひとつとして、次の走者に引き継いでいくものである。

しかし、継ぐべきものはここに来て加速度的速さで変貌しつつある。新しい建物が次々と建ち上がり、壁や机に残された「落書き」もすっかり消えてしまった。先輩たちの思考と苦悩の痕跡を色濃く残す景色が、透明な現代的空間によって脱色されていく。かろうじて、図書館の一隅で手に取った書物に残る手垢と書き込みとその名残をたずねることになる。しかし、その図書館も、数十年のうちには、電子化によって全く様変わりするだろう。グローバル化がもたらす「多様性」の波は、それと拮抗するだけの「共通な何か」を打ち立てることを要求するだろう。

とはいえ、根源と流動を見極め、継ぐべきものを後世に残す営みと空間こそが大学であった。前に進む力学と立ち止まる力学が織りなす知的永久機関こそが、大学の正体であると信じている。私自身は、生ける落書きとして、大学の景色のひとつになり、やがて消えていくとしても。

●常任理事

こまわらけいご
駒村圭吾